

総合的な学習の時間におけるキャリア教育

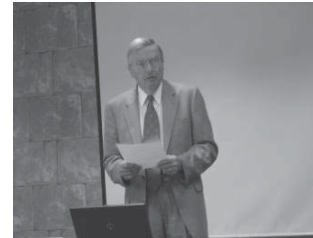
石田 博英（茅ヶ崎市立鶴嶺小学校）

はじめに

「後輩の学生達に教育について話して欲しい」との依頼を受けた。どんなお話が良いのだろうかと思悩んだ末、児童理解を深めてもらうという観点で、私が学級担任として最後に子どもたちと取り組んだ実践についてお話しすることにした。その為、16年も前の、しかも小学校での取り組みとなってしまった。中学校、高等学校の教師を目指しているだろう学生の皆さんに、どこまで受けとめてもらえるだろうかと一抹の不安を覚えながらも、以下のような話をさせていただいた。

1. アメリカ視察

この教育実践が縁で、平成17年度「外国におけるキャリア教育」調査団派遣事業（独立行政法人教員研修センター）の一員として、アメリカキャリア教育を視察する機会に恵まれた。



講義する Dr. Norman C. Gysbers

詳細な記述は差し控えるが、イリノイ州、ミズーリー州の小学校から高等学校におけるキャリア教育の実際を視察し、その理念Comprehensive Guidance Program Model（総合ガイダンスプログラム）について、Dr. Norman C. Gysbers（ミズーリー大学教育学部教授）より講義いただけたことは、キャリア教育のみならず、その後の自身の教育活動への大きな経験知となった。

2. 学習を立ち上げる

キャリア教育と出会う以前から、子どもたちの心の育ちに危惧していたこともあり幾つかの試みをしていた。尊敬する人物の伝記の感想文を書かせたり、NHKで放映されていた『プロジェクトX』のビデオを視聴し、その後に意見文を書かせたりと、子どもたち一人ひとりに何とかして“人の生き方”について考えさせたいと悪戦苦闘をしていた。

しかし確かな手応えは感じられなかった。書かれてくるものは通り一遍の表面的な内容のものばかりで、どう見ても自分自身の内面を見つめたものではなかった。その訳は分かっていた。この学習には子どもたちの心を揺さぶり心底実感させ得るだけの活動、行動が足りないのだと。このことを痛切に感じさせてくれたのが岩手県のS校長先生の学校再生への凄まじいほどの実践報告だった。それこそ校舎内をバイクが走るほどに荒れ果てていた中学校をわずか3年で見事に蘇生させた取り組みのバックボーンに有ったもの、それがS校長の『活動を通してはじめて価値が届く』の信念だった。人を変える大きな源となる価値観の転換は、本物の持つ迫力と子どもたちの実体験、そして関わる側の真剣な行動でしかないことをその時に改めて知り、私が考えている『生き方を考えさせる』学習を深め、

高める為には、小学生の子どもたちにとっての価値的な活動がどうしても必要だと考えるようになっていった。

そんな八方塞がりの中、平成14年2月学校長よりキャリア教育を勧められ、紹介されたNPOの皆さんとの出会いから生まれた“活動”が『様々な人と関わる』ことだった。故に本学習の柱となるものは、子どもたちの活動を通しての学びであり、その活動とは“より積極的に他者と関わること”であった。また、学習のテーマは【自分を見つめて】として、指導者は、子どもたちが活動を通して自分を見つめられる学習場面作りに心がけることとした。そしてこの学習場面の積み重ねにより子どもたちが自己理解を深め、明日の自分自身をイメージし、ひいては“より善い生き方”について考えられる一人ひとりとなって欲しいと考えたのである。

子どもたちがこれらの関わりを通して留意すべきことは、今の自分自身と目の前の他者とを比べることである。この具体的な指導と学習の視点がなければこの活動は意味をなさない。なぜならば子どもたちは目の前の他者と今の自分とを比較対することにより、自他同一化の視点や他者理解の感情が芽生え、結果的には、その過程の中で自ずと自己を見つめる行為がなされるからである。それ故に、以下の点に留意して学習を組織した。

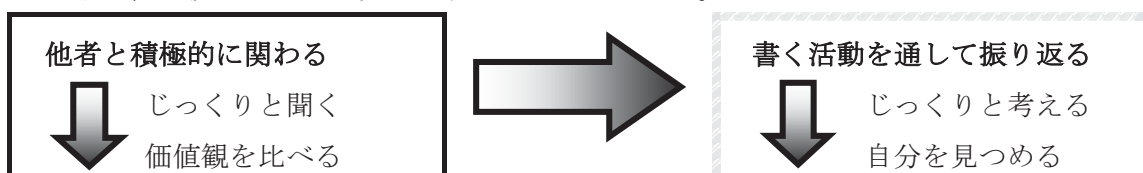
- ①インタビュー等の他者との積極的な関わりを通して、人と人との関わり方について学び、良好な人間関係力が培えるようにする。
- ②学習者とできるだけ多くの本物との出会いの場作りに努め、児童の確かな気づきが生まれるようにする。
- ③“活動”後における、自身をじっくりと振り返る為の書く活動を継続的に位置づけることにより、児童の“自分を見つめる”力の段階的な深まりを心がける。
- ④本学習を通して、児童が生きる価値について考え、将来の自分自身をイメージできる力を育めるようにする。

その上で、1学期は『働いている人』14時間、2学期は『戦争を体験したお年寄り』『国境なき医師団』17時間、3学期は『尊敬する人』『クラスの仲間』7時間とし、計38時間の計画の基でこの学習を子どもたちとスタートさせた。

3. 指導の実際

柱となる学習活動

インタビュー等を通して他者と積極的に関わる。そして書く活動を通して振り返る。この一見すると単調に思える作業の繰り返しこそが、実は本学習を支える重要な学習活動となる。なぜならば、【他者と積極的に関わり振り返る】を本学習の学習目標に沿った内的な活動に置き換えるならば次のようになるからである。



これは、子どもたちの学習にとってこの場面が如何に重要であるかを表しており、ここでの一連の学習活動の質の高さが、本学習の成否を決定すると言っても過言ではないのである。故に学習を組織するものとしては、徹底的にこの場面の設定にはこだわり、腐心した。それは、学習者と本物との出会いであり、学習者の学ぶ姿勢についてであり、そして膝詰めの語り合いを成立させるためのより多くのブース、場作りであった。



25のブースに別れた職業インタビュー会場

結果、協力的な保護者の皆さんの力により、多種多様（25種類）の職業の方々や戦争体験者（25人）が一堂に会することができ、この学習を子どもたちにとってより深い学びへと導くことができた。ご協力いただいた25の職業の方々は、次の通りである。

- | | | | | | |
|----------------|-----------------|-----------------------|--------------|------------|-----------|
| 1 システムエンジニア | 2 美容師 | 3 漁師 | 4 教頭先生 | 5 ライフプランナー | 6 プロサーファー |
| 7 日本舞踊の先生 | 8 海洋生態・環境研究員 | 9 潜水調査船（深海 6500）パイロット | 10 医師 | | |
| 11 スーパー店長 | 12 はり灸治療師 | 13 DJ | 14 サッカーのコーチ | 15 コンビニ店長 | |
| 16 ダンスインストラクター | 17 消防士（救急隊・消防隊） | 18 原子力研究者 | 19 精肉店経営者 | | |
| 20 大工 | 21 ペットショップ経営者 | 22 バレエスクール校長先生・バレリーナ | 23 農業（トマト栽培） | | |
| 24 警察官 | 25 市長 | | | | |

各学期の取り組み

1 学期【働くことを通して】14時間

『働くということはどういうことなのか。人は何のために働き、どうして働くのか？』我々大人でさえも答えに窮するような問いに対して、子どもたちに真面目に考えさせたいと思った。その為にできるだけ多くの職種の方々に集っていただき、子どもたちの仕事に関する質問に対して、本物の持つ実感と迫力で、各々の考えを子どもたちにぶつけていただくこう考えた。そうすることにより、人が働くことの意味について子どもたちが少しでも考えるきっかけ作りとなることを願った。そして、この活動を通して、これから生きていく子どもたちが、職業選択をする上での物差しが一つ増えてくれればとも考えた。

お話しいただく働く皆さんより、子どもたちに向けたメッセージを書いていただき、子どもたちはそれを基に興味関心のある職業を幾つか選んだ。また、インタビューする上での質問内容を考える手がかりとしても活用した。その上で、子どもたちは興味関心のある職業の方々への①インタビューを試み、その後②振り返りの作文を書き、働くことを通して自分を見つめた。この学習はここで終わることはなく、夏季休業時に行われた③職場見学へと繋がり、そして④将来働いている自分を思い描く活動へと昇華した。



職業インタビューに取り組む児童

②振り返りの作文【児童作文・下線は指導者による。以下同じ】

◆僕はこんなふうに人にインタビューするのは初めてだった。だから緊張した。最初は花屋さんにインタビューをした。でもその花屋さんの人はすごく親切で分かりやすく説

明してくれた。その人は、『いっぱいのお花に囲まれているからこの仕事は楽しい。』と
言っていました。やっぱり楽しい仕事をやっていた方が自分もやりがいがあるからかな、
と思いました。

最後に鍼のお仕事をしている人にインタビューをしました。でもその人は、目が悪いの
に鍼の仕事をやっているのはすごいと思いました。その人も『自分にあっている仕事があ
って良かった。』と言っていました。やっぱり僕も大人になったら自分にあっている仕事
を見つけ出し、やりがいのある仕事をやりたいなあと思います。（男子・全文）

③自分の目で確かめてみよう 【職場見学・夏季休業時に実施】

大型スーパー	ペットショップ	サーフショップ	保育園	県庁	放送局 (DJ)
コンビニエンスストア	ファーストフード店				計8ヶ所

◇振り返ってみよう（児童作文）【大型スーパー見学】

◆発電装置をちゃんと管理している人がいる。安全だと思った。今までは知らなかったけ
れど、デパートの裏で働いている人もたくさんいるんだなあと思った。発電機の中はすご
く暑かった。けれどそういう中でも一生懸命働いている人がいるなんて、すごい！！外に
出る時にアイスクリームを入れる箱を洗っている人がいた。いやな仕事だと思うけど、一
生懸命やっていた。まだまだ私には分からないけど、もっともっと奥で働いている人がい
ると思う。案内をしてくれた副店長さんも一生懸命教えてくれた。私も大人になったら一
生懸命仕事をしたい。（女子一部抜粋）

④働いている自分を思い描いてみよう

◆私は、夜は通信制の勉強をして、昼間に出勤している。まず、朝早く起きることから一
日が始まる。そして、用意を手早くすませる。家から近い位置にあるので、自転車で出勤
する。人があんまり来ないうちに、賞味期限や不良品がないかをチェックする。また、少
なくなっている品物を注文したりするのは、けっこう重労働だ。朝は、大抵涼しいからす
がすがしいが、周りがガラス張りなので、昼間や夏など、直射日光がはげしいときは、暑
くてたまらない。そして、昼間近くになると、だんだん人数も増えてくる。近くにアレセ
イア湘南があるので、その生徒が帰り際に寄りに来たりする。その時間帯には、店内は
大混雑である。やっぱり、人がたくさん寄ってくれるのは嬉しいことだが、とても疲れる。
そういう時の一番の励みになるのは、店長さんの励ましである。疲れているときに店長さ
んが優しい心遣いをしてくれるのは、とても嬉しい。

そろそろ帰る時間だ。店長さんや店の仲間に挨拶をして、自転車でまたがる。そして考
える。今度、近くの小学校の生徒がインタビューに来るらしい。店長さんは、『楽しいこ
となどを聞かれるらしいから、考えておいて下さい。』と言っていた。その時、私の場合
何かへと考える。考えているうち家に着いた。家でも考えていると、結局ひとつの事にま
とまった。それは『仕事をしているうちに、たくさんの人に出会うことが楽しい』という
ことであった。（女子・全文）

2学期【戦争と平和を通して】15時間

戦後60年を迎えようとしていた。子どもたちにとっての戦後とは、決して太平洋戦争ではなく、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争でもない。もとより彼らに“戦後”などという言葉は存在しないのだと知った。彼らが戦争のことを調べ学ぶことは、遠い遠い過去の歴史物語を学ぶことであり、我々が「関ヶ原の合戦」を学ぶに等しい認識でしかないと、指導者は感じた。ましてや生まれた時からこれだけ溢れる物に囲まれた生活をしていれば、戦中、戦後の信じられないような生活を想像することなどできようはずがない。故に、その中を必死に生き抜いてこられた戦争体験者と子どもたちとの出会いと語らいは大きな驚きを生み、子どもたちにとっての生きるための新たな価値作りの場となったはずである。まさに“学びの邂逅”となったのである。

そして学習後に戦争体験者の方が呟いた次の言葉が、この学習をより一層価値ある学びとしてくれた。『先生、私たちに戦後60年はあるが、70年はないんです』。



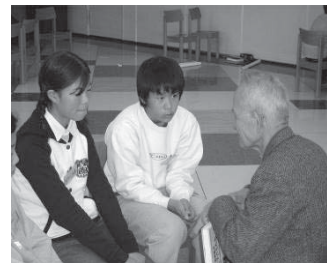
戦争について発表する児童

(1) 調べてみよう・伝えてみよう 12時間

児童一人ひとりが、夏休みに調べたことを基に戦争について分かったことや自分の考えをまとめた。その際には、それぞれが、どのような発表方法を取るかも併せて考えさせ、児童各自の創意工夫を図った。また、発表単位については、職業インタビュー時と同様のグループに分かれて、ポスターセッション形式で戦争体験者と保護者に伝えた。

(2) じっくりと聞いてみよう【知識を凌駕する実体験談】2時間

この戦争体験者の話は、子どもたちの発表後に行われることから、児童の戦争に対する知識や認識度に応じて語られ、より分かりやすく“熱い語らいの場”となった。また、児童にとっても自分たちが調べた歴史上の出来事を、体験者が目の前に表れ生の声で語ってくれたことは、自身の薄っぺらい知識が吹き飛ばされ、且つ今の自分自身を見つめる貴重な学習場面ともなった。



膝詰めで戦争の話聞く

(3) 振り返ってみよう【児童作文】1時間

◆体験談は〇〇さんに語ってもらいました。話を聞いていると〇〇さんは、大変苦勞したこと、鉄道で働いたこと、身近な人が亡くなったことを話してくれました。やっぱり身近な人が亡くなるということは、とても悲しいことです。その中でも妹の死が心に残りました。ろくに何も食わずに栄養失調により亡くなった。享年3歳でした。やっぱり苦勞したり身近な人が亡くなるということは、戦争がいけないと思います。〇〇さんも簡単に説明してくれましたが、「やられたらやり返すのではなく、相手を思う気持ちが大切」と話していました。いろんな事でこの言葉は必要なので、この言葉を忘れずに色々がんばろうと思いました。（男子全文）

【国境なき医師団（横浜国際人権センター）を考える】 2時間

（1）お話しを伺う 1時間

国境なき医師団として現在活動されている方のお話しを伺い、その行動を通して今の自分自身を振り返り自分を見つめさせた。

戦争体験者の時と同じように、子どもたちにとっては信じられないような世界を、その世界の人物が目の前に現れてリアルに語ったことが、究極のボランティアの内容と共に大きな驚きと感動と希望を生むこととなった。そのことは、子どもたちの振り返りが自分ごととして切実感をもって伝えてくれている。

子どもたちは、一つの事実を知ったことにより、それを自分の回りの世界に置き換え、これからの自分の生き方を考えられるようになった。

（2）振り返ってみよう【児童作文】 1時間

◆私が『人権』についてのお話しを聞いて先ず最初に思ったことは、「私が入権を気にして人と接してこなかった」ということです。“人をバカにしてはいけない”と思う反面、自分も少し人をバカにして人を傷つけていたのではないかと思います。人から親切を受けても自分が相手に親切にしていたかどうかを考えると、やっぱりあまり親切に相手の気持ちを考えていたりしていなかったと思います。

〇〇さんは、「自分の命を大切にすれば周りの人の命も大切だと思う心が大切」と言っていたけれど、その通りだと思う。『人権』という、人を思いやる気持ちを持った人が少ないからだと思います。だから自分は、人を思いやりながら生きていきたいと思います。〇〇さんに見せていただいた【国境なき医師団】のビデオは、食糧不足からガリガリに痩せてしまった子や、死体が転がっている場面を見ていて胸が熱くなってきました。自分が平和だと思っていたのは、自分の周りだけで、世界を見てみると、悲しい現実ばかり浮かんできます。国境なき医師団が給料も何ももらわずにボランティアで人々を助けたりしているのは感動しました。また、それと同時に、国境なき医師団がこんなにも色々な事をやっていたのは驚きました。今日の学習は、私の将来の事の勉強になりました。（女子全文）

4. 【より善く生きる】とは大人の学び

一年間子どもたちと取り組んだ総合的な学習の時間を使った『自分を見つめて』の学習は、児童が書いた振り返りからも明らかなように、指導者の思いを遙かに超えた子どもたちの学びと心の成長を確認することができた。子どもたちにこうした学習効果、変容をもたらした要因は何であったのか。指導者としては三つ挙げたい。

一つ目は、自分を見つめるための手だてとしてのフィルター（子どもたちが関わる他者）を設定したことにある。『自分を見つめる』とは、自己の内面への働きかけである。それを如何に小学生の子どもたちに理解させ、6年生児童が学習可能な具体的な手だてとするかが、この学習の大きなポイントとなった。その意味でフィルターの設定は、子どもたちの内的行為を見事に橋渡しする“学習場”となった。

二つ目が、前向きに学習に取り組む子どもたちの育ちである。5年生の時より担任同士

で、どんな6年生と育てて欲しいのかを繰り返し話し合い、共通理解を図り、計画的・意図的な指導に努めてきた。その証が子どもたちのこの学習姿勢となって表れたと信じたい。

三つ目に、この学習を支えてくれた大人達の関わりを挙げたい。『働くこと』を熱く語ってくださった今働いている人達、『戦争の悲惨さ、平和の尊さ』を孫に話すように優しく語ってくださった戦争体験者。そして急なボランティアにも快く応じ、学習を陰で支えてくださったNPOと学習ボランティア（保護者）の皆さん。こうした大人達の子どもたちへの温かな関わりがあったからこそ本学習は成立し、子どもたちの価値観を揺さぶり、変容させることができたのである。

そうしたことを鑑みながら、指導者として改めて本学習を振り返るならば、“子どもたちのより善い心の育ち”を願い、子どもたちの学びをデザインしてきた『自分を見つめて』の学習は、実は人と人とが積極的に関わることの意味を我々大人に教えてくれた、貴重な『大人の為の学び』であった、と思えるのである。作家山田太一氏の語った、『今必要なのは確信を装って子どもに徳を説くことではなく、迂遠でも、大人が自分で多少まじだと考える生き方を何とか現実に生きてみせるしかない。』（中央公論99. 9）の言葉が、今再び胸に迫ってくる。

終わりに

子どもたちの活動の様子を当時の映像を交えて紹介したこともあり、3学期の『尊敬する人』『クラスの仲間』の取り組みについては、お話しする時間が取れなかった。

そこで、1年間の学習のまとめとして、子どもたちが、保護者、地域の方々の前で卒業していく自分へのメッセージとして発信した『Discover myself』の児童発表原稿を紹介し、話に替えさせていただきたい。

【Discover myself 児童発表原稿（女子・全文）】

1学期と夏休みには『職業』を通して自分を見つめ、2学期は『戦争と平和』の発表と戦争体験者の方の話を通して、3学期は『37人の良いところ・素敵なおとこ・輝いているところを見つけよう』や、『自画像のデッサン』を通して自分を見つめてきました。

総合の学習では、この『自分を見つめて』という学習でしか出来ないことをたくさん学べたので、とても良い経験になったと思う。その中でも人権についての話で、親切な気持ちの事やだれかが困っているのに知らん顔をしてそのままにしていたり、自分がしなければならないことなのに他人事みたいにしているなど、今の私に足りないようなことの勉強だったので、それが一番自分を見つめられたような気がしました。

6年生の最後には『自画像』と尊敬する人から連想するものをデッサンしました。私の尊敬する人は、障害者でゴスペルシンガーのレーナ・マリアさんという人で、連想するのは菜の花にしました。菜の花にしたわけは、そのレーナ・マリアさんが、私の中では明るいイメージだったので菜の花の花言葉『快活』がぴったりだ！！と思って、そうしました。私がどうしてレーナ・マリアさんを尊敬する人を選んだのかと言うと、いつも前向きに色々考えられて、自分の体が不自由ということをコンプレックスに思わず、自分の不自

由なことは人の倍努力して頑張る所が好きだし、すごいなあと思うからです。

こんな私はまだまだ足りない部分があるけれど、将来は寝たきりのお年寄りなどを介護する介護士になりたいと思っています。大人になるまでにこの足りない部分をなくして、これからは総合の学習で学んだことを何かあった時に活かせるようにしておきたいです。